

Title	とびうめ通信 No.2
Author(s)	
Citation	
Issue Date	2008-11
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5039
Rights	
Description	国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・知識科学研究科 大学院教育改革支援プログラム「グループワークによる知識創造教育」 - 多様性を活かす大学院教育に向けて - ニュースレター



とびうめ 通信

No.2 2008.11

HEAD NEWS

藤波研究室が「毎日介護賞」に入賞!

—「世代間コミュニケーション・プロジェクト」ほか認知症ケアの活動に—

高齢者介護に新しい取り組みで貢献する団体を表彰する「2008年毎日介護賞」(毎日新聞社主催)において、「認知症高齢者の介護支援」をテーマに研究活動を行ってきた藤波 努准教授(知識科学研究科)の研究室が毎日新聞社北陸総局長賞に選ばれました。大学院生が地域と連携し、幅広い研究活動を行っている点が評価されての受賞です。

創作劇による認知症ケアのコミュニティづくり

今回表彰対象となった研究活動の一部「世代間コミュニケーション・プロジェクト」は、本教育プログラムの学生グループ・プロジェクトとして行われています。高齢者の体験的な記憶を子どもたちが創作劇として再編し、上演するという一連のプログラムで、地元・能美市宮竹地区の小学校やグループホーム、地域のお年寄りなどの協力を得て2年前から実施しています。

元々、「経験を通して体で覚える知識＝“身体知”」を専門分野とする藤波研究室では、思い出を語ることによって認知症の症状改善などを図る「回想法」の実践を行っていました。そこへ、能美市と本学の学官連携協定*にもとづいて「認知症高齢者の増加を防ぐための環境システムの構築」(下線筆者)というテーマが加わりました。認知症介護を地域全体で見守ろうという近年の考え方や、「回想法」をあわせて練り上げられたのが、この「世代間コミュニケーション・プロジェクト」でした。



お年寄りの思い出語りに聞き入る子どもたち。話のなかから、創作劇に取り入れる題材を拾っていく。サポートで各グループに入った学生も話に引き込まれ、思わず身を乗り出す

多くの人を巻き込む秘訣は「楽しさ」

このプロジェクトの代表として初年度からリーダーシップを執る山崎 竜二さん(博士後期課程、藤波研究室)。「参加者が認知症の方と関わることを楽しいと感じれば、次のステップも参加しようという気持ちになるし、関わってくれる人も増える。強制ではなく、自然に巻き込まれていく形で、地域のなかに認知症ケアのコミュニティを創り出すことができないかと考えました」。山崎さんの狙いどおり、プロジェクトは子どもたちの保護者や市役所、社会福祉協議会、博物館、児童館、劇団など多くの人が関わる大掛かりなものになりました。

学内も、今年度は8名程度のコアメンバー、20名のメーリングリストメンバーが藤波

受賞のニュースを聞いて、「このプロジェクトに参加してくれている子どもたちやお年寄りに、まず伝えたいと思いました」と語る山崎さん



研、國藤研、小坂研、梅本研、宮田研、伊藤研、永井研など、さまざまな研究室から集まっています。「グループワークの一番の魅力は相互触発。プロジェクトの枠組みが大きくなれば、それだけ多様な分野の協力が必要になる。それぞれの目線から得られた気づきを、各自が自分の専門分野に照らし返すことで、さらに研究が進む。それがまたメンバーの動機づけになり、グループの力を高めていくのだと思います」(山崎さん)。

改善を重ねつつ発展してきた活動は、3年目を迎えてさらに大きくなろうとしています。今回の受賞を糧に、ますます充実していくに違いありません。

*学官連携による地域課題の解決を目的に、2006年春締結。



10月16日毎日新聞朝刊



グループ創造教育のさらなる試み

—学生にフィールドワーク体験を・白山里合宿(三村修隊長、國藤進研究室主催)—

今回はフィールドワークを中心とした合宿形式のグループ創造教育の試みを紹介します。教室を飛び出し、豊かな自然、地元の人たちとのふれあいなど、現場を肌で感じることで学生にもさまざまな変化があったようです。

5泊6日の合宿生活

合宿は、温泉付き研修施設「白山里」(白山市瀬波・旧吉野谷村)において、8月24日(日)～29日(金)の5泊6日で行われました。フィールドワークによる取材を取り入れた知識創造技法の習得をめざし、留学生を含む博士前期課程の学生 11 名が参加。白山麓というフィールドのなかで、地理、文化、産業、歴史など自らの興味に沿って取材し、データのまとめまで行うという密度の濃い時間を過ごしました。



フィールドワークで訪れた民俗資料館の畑で、職員の方と

1日目

8月24日(日)

2日目

8月25日(月)

3日目

8月26日(火)

1日目●8月24日(日)

**正午頃に白山里に到着。
まずは自らと向き合い、
興味を探る。**

このエリアに詳しい学生の話やパンフレット・地図などの事前収集資料を参考にして、興味に近い者同士でグループを作り、問題提起のグループ作業。初日から深夜2時まで話し合うグループも。これも合宿の醍醐味か。



2日目●8月25日(月)

**午前中は昨日のグループ
作業について発表。
午後からさっそく取材へ。**



4台の車に分乗し、白峰、中宮、鳥越などそれぞれの目的地へ。事前のポイントは一切なし。とにかく現場へ! ほぼ全員が初めてのフィールドワーク。当然「恥ずかしくて声がかけれなかった」「聞きたいことが聞けなかった」などの失敗談が多かったものの、牛首紬の工房では、熱心な交渉で工場長さんへの翌日の取材ポイント獲得に成功したり、訪れた寺院でタイミングよく和尚さんに出会って話を聞けたりと、うれしい結果も。みんなの成功・失敗の経験をもとにそれぞれ明日の作戦を立てて、就寝。

3日目●8月26日(火) **引き続き現場取材。**

朝から牛首紬工房の工場長さんの取材へ。ほぼ全員で押しかけ、質問攻めに。その後それぞれのフィールドへ散り、旅館の女将、地元の農家の方、立ち寄った温泉の受付の方などにさまざまな話を聞く。徐々に知らない人に声をかけることにも慣れてきた。最初は怪訝な顔をされることもあったが、きちんと趣旨を説明して、熱心をお願いするうちに、相手もそれに応えてどんどん知らない話を教えてあげようという雰囲気になった。

4日目●8月27日(水)

取材で得た情報から 図解を作成する個人作業を開始。 数名は引き続き取材も。

まずは膨大な取材メモをデータカードにする作業から始める。実際に自分で取材した生情報をデータカードにするのは初めての体験。1枚のカードにひとつのことをいかに表現するか。1枚の重みを改めて思い知る。

一方、取材を続けたグループにのなかには、未舗装の道での脱輪、しかも頼みの携帯電話が圏外、といったトラブルも。しかし、その苦勞の甲斐？あつてか、帰りに偶然出会った山菜採りのおばあさんに、今となっては非常に珍しい「出作り」*の話を聞くことができた。

*村から離れた山奥に小屋を持ち、焼畑などを行う農家。冬季に山を降りる季節出作りと、山中で越冬する永住出作りがある。



理想と現実
貴族の白山信仰は理想的で、庶民の白山信仰は現実的だった。

全て是水
白山の恵みも、災害も水に関係するので、白山信仰に水はつきものである。

白山珍名所
今でも御神体が仏など、謎な神社が白山にある。

一粒で二度おいしい
観音様にお参りすると、現世と来世のご利益がある。

兵どもが夢のあと…
百姓や大名の反感を買った僧兵は、一向衆によって全滅した。

白山信仰の過去と現在
1. 図解作成日時: 2008/08/29
2. 図解作成場所: 白山里
3. データソース: 白山市北部取材 データカード(190件)より54件抽出
4. 作成者: 古川洋章(JAIST)

気分は貴族?
天領の地区は、貴族的な文化だった。

過去から未来へ
泰澄大師の開山から、現在の白山登頂は続いている。

残るモノ消えるモノ
住民の仏への信仰は高いが、寺が減っている。

古川洋章さんの作品
「白山信仰の過去と現在」

5日目●8月28日(木)

引き続き図解の作業。

朝から晩までひたすら作業が続く。ほとんどが翌朝 5時、6時まで作業。中には1時間しか寝ていない学生も。

4日目

8月27日(水)

5日目

8月28日(木)

6日目

8月29日(金)

最終日

6日目●8月29日(金) 最終日

成果発表。

前日からほぼ寝ないで作業を続け、午後から一人ひとり発表。最終的に図解が完成したのは数名だったが、完成できなかった学生も、調べたことを発表したり、この合宿に参加しての感想を述べたりして、自分なりの成果を確認した。



学生のイキイキとした 発想を生むフィールドワーク

今回の合宿は、学生たちにとって極めて意義深い教育プログラムとなりました。

まず、合宿という形式そのものが素晴らしい経験だったようです。豊かな自然、心温まる宿、山里ならではの食事、温泉。特に留学生などは、こうした所へ足を運ぶこと自体が少ないのが現状でもあります。

グループでひとつのテーマに集中して取り組むという機会も、こうしたチャンスがなければ実際にはなかなか経験することはできないでしょう。

また、参加者の一人は「話が八艘飛びに盛り上がっていく高揚感は何とも言えないものがあった」と対話の楽しさを一番に語ってくれました。いつもとは違う空気の中、教室でのグループワークとはひと味もふた味も異なるイキイキとした知識創造を体験したようです。

最後にこの場を借りて、素晴らしいサービスとご馳走を提供してくださった「白山里」の皆さま、そして学生たちの取材に快く応じてくださった白山麓の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

学生グループ・プロジェクト・ファイル

Student Group Project File

公募提案型研究助成制度により、学生たちがプロジェクトチームを結成して研究活動を行う「学生グループ・プロジェクト」。この制度を利用して、今年度の「学生対抗バーチャルリアリティコンテスト (IVRC)」にチャレンジしているのが、チーム「くろびかり」です。6月のプレゼン審査で見事トップ通過を果たし、9月の東京予選に進出した彼らの活動を追いました。

FILE 02 かおさがし

チーム「くろびかり」

左から、藪 慎一郎さん、宮田 直貴さん、松本 遥子さん、堤 孝博さん、寺澤 玲緒さん。松本さんと寺澤さんは西本研究室、堤さん、宮田さん、藪さんは宮田研究室所属の博士前期課程1年生。



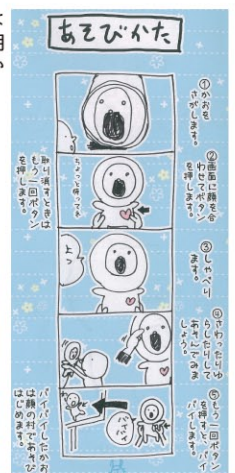
「かおさがし」って何？

天井や柱の木目、空き缶の口など、身の回りのものが顔に見えることはありませんか？「かおさがし」は、そんな「顔」たちと遊ぶことができる作品。カメラ付きの人形で撮影した「顔」は、そのまま人形の顔になり、表情を変え、しゃべり始めます。撮影するのは実物・絵・写真なんでもOK。2つの目と口の3点を抽出することで顔として表示します。目・口の配置や大きさにより、「なきむし」「うちゅうじん」「せいぎのみかた」などのキャラクター（性格）が自動的に選択され、人形の顔に触れるとキャラクターごとに異なる表情・声の反応が返ってきます。自分で見つけた「顔」を持つ人形とのコミュニケーションを体験できる。それが「かおさがし」です。



右)メンバーの手による、遊び方を説明する「とりあつかいせつめいしょ」

左)撮影した画像が人形の顔になる



■24時間体制で企画づくり

生みの親・チーム「くろびかり」のメンバーは、宮田研究室がIVRC出展者を募集していると聞いて集まった5人。チーム結成時の4月はまだ研究室配属前でしたが、「1年生からシステム開発に携われるチャンス」と名乗りを上げた意欲あふれる面々です。

出展作品を企画するにあたり、5人は専用のBBS (掲示板) を活用して昼夜を問わずアイデアを報告。互いにアドバイスを交わしながら

ら、「寝ても覚めても企画のことを考えた」という2週間で75のアイデアが集まりました。ここから全員投票によって各メンバーのベスト企画を選び、それぞれがIVRCの書類審査に応募しました。すると、何と5人のうち2人の企画が審査を通過！しかし、準備期間を考慮して「企画を一つに絞るべき」との結論に達し、出展会場でのアピール性に優れた「かおさがし」で勝負をかけることになりました。



Check!

宮田研とIVRC

「くろびかり」をサポートした宮田研究室は、学生のプロジェクト遂行能力を育成する目的で、2003年からIVRCへの出展を行っています。教員・先輩からの出展経験に基づくアドバイスと、ITツールを使った企画づくり、そしてグループワークによって、2004年からは5年連続で本選出場を記録しています。

メンバーがアイデアを寄せ合うBBS。研究室の教員や先輩から貴重なアドバイスを受ける場にもなっている

■グループワークによる進化

企画が決まれば次はシステム制作。プレゼン審査を通過した後、8月から本格的な作業に入りました。役割分担はメンバーの得意分野により決定。毎週の打ち合わせやブログなどで進捗報告・スケジュール管理を行い、メンバーが互いに緊張感を与え合いながら制作に取り組みました。

実際の制作では、企画の段階では不透明だった技術的問題がいくつも表面化しましたが、教員・先輩から助言を得ながら力を合わせて対処。また、グループワークを通じて、撮影した「顔」を保存してスクリーンに表示する「顔の村」のアイデアが生まれ、出展スタイルのコンセプトも固まりました。

予選大会直前には夜を徹しての作業が続きましたが、困難を乗り越えてついにシステムが完成。チームは満を持して東京へ向かいます。



右) デザイン、工作、縫製、プログラミング…。さまざまな知識・技術を持ち寄りシステムを完成させる
下) 協同作業から生まれたアイデア「顔の村」



■予選突破!そして本選へ

9月13日(土)・14日(日)、IVRC東京予選大会。「くろびかり」のメンバーは人形を模した着ぐるみをかぶり、自分たちがデザインしたパンフレットを配布するなど積極的にPRを展開しました。その甲斐もあって、メディア関係者を含む大勢の来場者が「かおさがし」を体験。作品の完成度、統一された世界観が高い評価を受けました。

審査の結果、チームは2位に入賞し、岐阜本選への進出を決定! さらに、一般来場者による人気投票で1位、大手ゲーム会社よりFROM SOFTWARE賞を獲得する栄誉に輝きました。

しかし、本選へ向けて課題も山積み。来場者アンケートの結果を元に、キャラクター設定の見直しや、より自然で柔軟な表情の制作といった課題に取り組みます。本選の開催は11月7日(土)・8日(日)。めざすはもちろん優勝、そして海外進出です!



趣向を凝らした展示ブースは大勢の来場者で賑わった



賞状を掲げて記念撮影

くろびかりの声

■松本 遥子さん(企画・総指揮・デザイン)
一人ではできないこともチームの力で達成することができました。グループワークでこそ実現できる可能性の大きさを感じています。ご支援・ご協力いただいた先生方、先輩方に感謝いたします。

■堤 孝博さん(画像認識プログラム)
完成までに多くの壁がありました。メンバー全員が完成を信じて最後までやり遂げることができました。たくさんの方に楽しんでもらえたことが何よりの喜びです。

■寺澤 玲緒さん(音声・Web・DTP)
グループワークを通じて、チームの一体感が高まりました。皆と力を合わせ、岐阜での優勝、そして海外での出展をめざして、より一層努力していきたいです。

■宮田 直貴さん(画像変形プログラム)
研究室が本選に連続出場していたこと、チームの皆に迷惑をかけられないということが、ものすごいプレッシャーでした。子どもたちに作品を楽しんでもらえて報われました。

■藪 慎一郎さん(デバイス設計・制作)
皆で一つの作品を作り上げたことで、「やればできる」ということを実感しました。予選で分かったお客さんの反応や問題点を踏まえ、本選に向けて改良に励みたいと思います。



岐阜本選の結果はコチラで!

かおさがしWeb ● <http://www.jaist.ac.jp/~miyata/LabHP/projects/kao/>

日本と海外をつなぐ架け橋 —「ブリッジSE」をめざして— ブリッジSE講演会

■日時:10月9日(木)13:30~15:00

■会場:本学 知識科学研究科棟5F コラボレーションルーム2

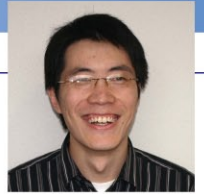
オフショア開発*に取り組むIT企業が増えるなか、文化の違いやコミュニケーション不足を原因とするトラブルも増えているといいます。そのような状況下で注目を浴びているのが、言語や文化における両国間のビジネス習慣の違いを熟知し、間に立って円滑に業務を進める「ブリッジSE」です。

本学においても、今年8月、留学生を中心メンバーとする「ブリッジSE研究会」が発足。10月9日に同研究会の主催で講演会が開催されました。講師は日本におけるブリッジSEの第一人者・幸地 司氏。研究会メンバー以外の学生も多数参加し、大盛況でした。

*情報通信企業が、システム開発・運用管理などを海外事業者や子会社に委託すること。



講演だけでなく、グループワークや質疑応答も活発に行われました。講演会終了後の懇親会では、業界の最新動向など耳よりの話も



「ブリッジSE研究会」代表

李 江涛さんに聞きました!

Profile リ・こうとう/中国出身。勤務先で日本製品を取り扱ううちに日本に興味を抱き、5年前に来日。金沢星陵大学で学士(経済学)取得。今年4月本学知識科学研究科に入学。梅本勝博研究室所属。

■研究会を立ち上げた経緯は?

情報系の仕事に興味はありましたが、「ブリッジSE」のことは研究室に入るまで全く知りませんでした。しかし、徐々にこの仕事の将来性に魅力を感じるようになり、今年8月、中国・ベトナムからの留学生を主とする9人のメンバーで研究会を立ち上げました。

■研究会の活動は?

月に1回、テキストの輪読会を開催し、ディスカッションしながら理解を深める活動を行っていましたが、毎回5~6人しか集まらず、今後も続けていけるかどうか不安でした。そんななかで開催した今回の講演会では、研究会メンバー以外の学生もたくさん参加してくれ、強い興味を示してくれました。現在のメンバーは16名。これからの研究会が楽しみです。

■これからの目標は?

今まではブリッジSEを「システム開発における通訳者」くらいにしか思っていませんでしたが、講演会を通して、それだけではない難しさがあると感じました。もっといろいろな講演を聞きに行ったりして勉強しなくてはなりません。今後も研究会を引っ張っていけるように頑張ります!

時代が求める「使命達成型職業人」をめざせ! 集中講義「プロジェクトマネジメント・初級編」

■日時:9月16日(火)~19日(金)9:20~16:40

■会場:本学 知識科学研究科講義棟2F 中講義室

さまざまな場面において、文化や価値観の異なる人々との協働が避けて通れなくなった現代。「あうんの呼吸」でコミュニケーションを図りながらものごとを進める日本式のやり方に、取って代わりつつあるのが「プロジェクトマネジメント」です。

ここで言う「プロジェクトマネジメント」は、一般用語ではなく、プロジェクトの遂行に必要な要素を「標準化」し、目に見える形にすることによって、効果的・効率的にミッションを達成するための手法を指しています。

本学の学生たちは、社会に出れば若いうちからチームを率いるリーダーとしての役割が期待されます。そこで本教育プログラムで企画したのが、この「プロジェクトマネジメント講座」です。

初級編は、9月の集中講義で実施。講師には、大手企業で長年プロジェクトマネジメントの実践経験を積んでこられた、日本プロジェクトマネジメント協会の古園 豊氏と梶原 定氏をお迎えしました。めざすのは、複雑化する課題に解決の道を開き、企業価値創造の中心を担う広い領域を

集まった学生は約30名。ほぼ全員が企業への就職希望者でした



持った専門家「使命達成型職業人」です。4日間にわたって、「プロジェクト」という言葉の定義から、組織・コミュニケーション・資源・リスクなどの個別マネジメントまで、みっちり学びました。

12月には中級編も開講予定。近い将来、実社会において、この講義で得た知識が活かされることを期待しています!

KEY WORD

●「プロジェクト」とは?

特定の使命 (Project Mission) を受けて、始まりと終わりのある特定期間に、資源・状況などの制約条件のもとで達成をめざす、将来に向けた価値創造事業のこと

●「プロジェクトマネジメント」とは?

特定の使命を達成するために有期的なチームを編成し、プロジェクトマネジメントの専門能力を駆使して、プロジェクトを公正な手段で効率的・効果的に遂行し、確実な成果を獲得する実践的能力をプロジェクトに適用すること

出所:日本プロジェクトマネジメント協会

とびうめ通信 No.2 (2008年11月)

発行:国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科

大学院教育改革支援プログラム「グループワークによる知識創造教育」 代表 梅本 勝博

〒923-1292 石川県能美市旭台1-1 知識研究棟7F 電話 0761-51-1711 (梅本研究室) <http://www.jaist.ac.jp/groupwork/>